

学生と若手研究者のための日韓合同合宿研究交流会

高木, 英行
九州芸術工科大学音響学科

姜, 根澤
釜慶大学校電子工学科

<https://hdl.handle.net/2324/4488129>

出版情報：日本ファジィ学会誌. 10 (4), pp. 687-689, 1998. 日本ファジィ学会
バージョン：
権利関係：



学生と若手研究者のための 日韓合同合宿研究交流会

高木 英行^{*1} 姜 根澤^{*2}

開催への経緯

標題の教育プログラムが、1998年6月21日(日)14:00~22日(月)朝にかけて、SOFT九州支部とKFIS(韓国ファジィ・知的システム学会)釜山・慶南支会の主催で行われた。主催者側の立場から、今回の報告を行いたい。

昨年6月の九州支部長就任時の支部運営方針「規模に見合った負担と全国規模での活動」の後者に対して、支部の地の利を生かした教育イベントとして昨年度から準備してきた企画である。1年前からSOFT九州支部からKFISに提案し、昨年8月にはソウルで前会長の閔庚燦教授や朴政用教授と高木が話し合いをしてAFSS'98と日程を連動させることを決定した。

その後のKFISの内での話し合いで、釜山・慶南支会を正式な韓国側主催とした。学生のための教育プログラムとしての日韓合同の合宿はこれまで聞いたことがなく、異なる環境の同じ分野の学生にはよい動機付けになると期待された。このため、釜山・慶南支会からも積極的な賛意が得られ、姜を現地実行委員長として準備に入った。

開催準備と目的

3月に九州支部が行った学生のための合宿研究会[1]のアンケート解析から、合宿の最大の効果は、自由な雰囲気で同じ立場の学生の声を直接交換することによって、研究に対する動機を高めること、あることが分かった。そこで、当初考えていた研究発表よりも教育の観点に重点を置き、同じ分野の知り合いを増やし、研究の取り組み、考え

方、悩みなどの交流を通じて動機を高めることを主体とするプログラム編成を行った。また、不慣れな英語でのコミュニケーション経験もこの合宿の大きな目的である。この交流を促進するために、事前の準備には結構配慮した。

はじめに研究室や各自の研究紹介を自己紹介代わりに行ってもらうことで声をかけやすくし、統いての2つのグループ討議と朝方にまで及ぶ自由討議の3本を柱にプログラムを組んだ。グループ討議を2つにしてメンバーを入れ替えたのは、人とのネットワークを広げるためである。声をかけやすくするため、1回目のグループは4名ほどの小グループとし、2回目のグループは多少大きくして、かつその後の深夜の自由討議に連続できるよう同室メンバーを中心に配置した。

また、声をかけやすくするため、漢字と英文字表記による名札と、所属・電子メールアドレス・研究分野も書き込んだ参加者名簿を準備して、全員に配布した。また、会議前での交流を進めるため、ホームページへ自己紹介、グループ編成、部屋割りなどを掲示し、かつメーリングリストを開設して自己紹介を流すなど、事前に、グループメンバー相互に関心を持ってもらうような仕組みを用意した。また、コミュニケーションを促進するため、夕食と夕食以降のディスカッションのためにアルコール飲料を各種用意することも、計画のうちである。

場所・会場

会場は、福岡市の姉妹提携都市、釜山市のリゾート地域である海雲台のコンドミニアムを借りて行った。AFSS'98会場の馬山市でなく釜山市にした理由は、AFSS'98に参加しない日本人合宿参加者が玄関となる空港や港から移動しやすく、かつ帰

Hideyuki TAKAGI and Geuntaek KANG

*1 九州芸術工科大学音響設計学科

*2 釜慶大学校電子工学科

国しやすいことを考慮したためである。釜山市は福岡から約240km、毎日平均2往復の高速艇で3時間弱で結ばれている。1泊2日のツアー(ホテル代込)が16,000円からある福岡から見ると、釜山は、日本のどの観光地へ出かけるよりも身近な外國である。

参加者

(D生、M生、教官)の参加者数は、韓国(8,7,7)、日本(4,1,3)である。ただし双方のD生には社会人D生を含む。

韓国での合宿に参加する日本人学生を一定数確保することが今回の合宿成否の鍵になる。旅費滞在費を考えると、AFSS'98への参加学生しか望み薄なため、AFSS'98から日本人著者のメールアドレスを取り寄せ、支部ホームページ、電子メール、学会誌、FSS'98、個人のルートで開拓し、最終5名の学生確保ができた。特に、3月の「ほっと暖まる合宿研究会」で学生のための合宿交流の有効性を理解されておられる北九州高専の白濱氏は、合宿だけのために1泊2日で韓国へ私費渡航された。また、会議では翌朝まで徹夜で学生のまとめ役を引き受けられておられた。紙上を借りて感謝したい。

韓国側は、釜山・慶南地域を中心としてファジィを研究する大学の各研究室に連絡し参加者を募集した。その結果、ソウルや大田からの学生5名も含めて20名以上が集まった。定員20名〆切後も希望者が集まった次第である。



会場にて参加者全員

プログラム内容

2つのチュートリアルセミナー(李尚培「ファジィニューロ制御システムと産業応用」、高木英行「インタラクティブ進化計算」)、自己紹介兼用の研究室・研究紹介、2つのグループディスカッション、深夜12時からの自由討議がプログラムで、これに韓国料理の夕食と、カルビースープの朝食が加わった。韓国では既に夏休みに入っているが、日本は学期中なので長居ができず、22日(月)に帰国する日本人参加者のため、朝食後解散した。

主催の両支部から費用補助をしたとは言え、食事は豪勢で、十分な日韓の焼酎、マッコリ(韓国のどぶろく)、ビールにリゾートコンドミニアムでの宿泊代を含めて5千円とは、日本の感覚からはとても信じがたい。

コミュニケーション

一般に国際会議での日韓の参加者からの質疑応答を見ている者としては、英会話に慣れていないであろう学生同士の英語でのコミュニケーションがスムーズに進むかどうかが大きな懸念であった。そのため、前述のいろいろな仕掛けを用意した次第であるが、いざ蓋を開けてみると、心配するほどのことではなく、頗もしい限りであった。お互いに、他の学生、特に相手国の学生に興味があって参加した学生たちであり、事前に動機付けができるたこと、アルコールの手伝い、学生による語学のレベルの違いも当然あるが、アンケートから分かるように、英語に難があつてもコミュニケーション自体には支障がなかった、ということであろう。このことを体験してくれたこと自体、この合宿研究交流会の大きな教育的目的を果たしたと言つてもよいと思う。

なお、韓国ではmeetingは男女のmeet、つまりデートも意味するそうだ。Over-Night Meetingに参加することを誤解した彼女への説得が大変だった、という微笑ましい自己紹介もあった。

韓国語歴4年の中島先生(富山大)や今回のためにこの4月からNHKハングル語講座を始められた畠見先生(創価大)は別格として、他の日本人参加者は、10分で読めるハングル文字講座で町中の



深夜からの自由討議

いろいろな文字が読めるようになった。外来語はそのまま理解でき、漢字も発音に類似性があって、理解できる場合も多く、会場への行き帰りで楽しい市中演習をしていた。学術の世界では英語は必須としても、韓国語と日本語は、文法がほぼ同じで、発音もかなりの類似性のあるので第2外国語としてもっと相互に普及してもよい言語である。参加者のM生の1人が、「なぜ中学から勉強してきた英語よりも、ここ1年で勉強した日本語の方が話しやすいのか自分でもよく分からない」と主に日本語を使っていたことを知られれば、日本の読者も韓国語を勉強してみようと思われるのではないか?

参加者の声

アンケートを見ると、グループ交流や朝までの自由討議で得るもののが大であったという意見と、同じような分野の知り合いができたことに満足したとする回答が多く、開催に関わったものとしては報いられた思いである。

改善としては、もっと長い時間を持って欲しいという意見が大半であった。今回のように日本人参加者にとっては学期中であることやAFSS'98からの参加で滞在が長引いている事情からは難しい点もあるが、教官と学生の話し合いの場を設けたい、という要望などは今後の企画があれば反映させていきたいと思う。

最後に

今回の合宿交流会では日韓の若い学生に研究分野だけでなく、いろいろな面でお互いの理解に大きく役立ったことと思われる。参加者の電子メールアドレス入り名簿を各自が持ち、メーリングリストもまだ当分残っているので、合宿後も交流が続いてくれればと期待している。例えば、10月のIIZUKA'98に今回参加の韓国の学生が来日するので、本学の学生とも連絡を取り合うようである。

今後もこの企画を続けて欲しいとの声は、アンケートにも問い合わせにも多い。が、単独開催で学生を海外に派遣するには現実的に困難が予想される。しかし、双方の負担が多いとはいって、他の国際会議と連動するなど、機会を見つけるのであれば、検討もしてみたい。また、九州支部では、この10月30-31日にFANシンポジウムと連動して国内の学生向け、合宿研究会を予定しているが、同様に、韓国でも国内学生のための同様な合宿研究会を企画してもよいと思う。

なお、今回の参加者リスト、プログラム、アンケート結果、写真などを、<http://www.krc.ac.jp/soft/korea/index-j.html>に掲示しているので、興味ある読者はご覧いただきたい。

文献

- [1]白濱、仲田、大崎、岡田：「ほっと暖まる合宿研究会」を終えて、日本ファジィ学会誌、vol.10, no.3, pp.71-74(1998)

問い合わせ先

高木 英行
〒815-8540 福岡市南区塩原4丁目9-1
九州芸術工科大学音響設計学科
TEL & FAX: 092-553-4555
E-mail: takagi@kyushu-id.ac.jp
姜 根澤
〒608-737 韓国釜山市南区大淵洞
釜慶大学校 電子工学科
TEL: +82-51-620-6460
FAX: +82-51-628-7433
E-mail: gtkang@dolphin.pknu.ac.kr